

『文選集注』江淹「雜體詩」訳注

本訳注について

稀代麻也子

本訳注は、筑波大学で稀代が授業を担当している大学院演習の成果である。『文選』の先行研究はすでに厚い層をなしている、集注本を中心に江淹の「雜體詩」を読むということに限ってみても、森野繁夫氏の『文選雜識』（第一学習社、第一冊一九八一年・第三冊一九八四年）の校勘・札記がある。訳注の原稿を作成していく過程で、多くの優れた先行研究の恩恵に浴している。加えて、身近に存在し研究の道で先をゆく方々の様々な方面からの御高配にも支えられている。温かいお心遣いに感謝している。

「雜體詩」は、集注本では卷六十一・六十二に収められている（『唐鈔文選集注彙存』第一冊の六六三頁以降。劉琨に擬した作から卷六十二）。六十卷本の『文選』では卷三十一にあたる（中国古典文学叢書では第三冊の一四五二頁以降）。「雜體詩」三十首と序のうち、集注本でほぼ全体が残っているのは、序と十三篇（古離別・曹植・王粲・潘岳・陸機・左思・劉琨・盧湛・郭璞・孫綽・許詢・殷仲文・謝混）である。

「雜體詩」を集注本で読むという試みは二〇〇八年度から

していて、すでに序と古離別および曹植に擬した作品については取り上げたことがある。最初は、そのまま続けていくつもりであった。しかし、年をおうごとに活発な議論をするようになっていく院生たちに接しているうちに、それぞれの作品の担当者が折角長い時間をかけて準備してくる資料を、私がすぐに散佚させてしまう、それをもったいないと感じるようになった。生き生きと活発な議論は、回転の遅い私を大いに刺激し、鼓舞してくれる。一週間の活力を与えてくれる参加者たちの努力と情熱をそのままにしようのが惜しくならなくなった時に取り組んでいたのが、王粲と潘岳であった。授業では序から順番に読んでいたのに、最初にこの二篇を発表することになったのは、以上のような事情からである。すでに読んだ部分については、潘岳より後の部分を読んでから、また戻って再度検討したうえで発表したいと考えている。研究の方法に関する点で誤謬があれば、それはすべて稀代の責任である。一方、作品が豊かに読めていれば、原稿執筆担当者を始めとする院生たちの成果である。訳注原稿作成という作業を通すことによって「雜體詩」のそれぞれの篇をいかに豊かに読むことができるか、集注本によってこそ導かれる読みというものが訳注完結までの間にどの程度出てくるか、楽しみである。

凡例

○各篇は、「雑体詩」の本文・書き下し文・押韻・校勘・現代語訳、「集注」部分については、標題および「雑体詩」の二句ごとに、本文・書き下し文・校勘・現代語訳・担当者の注の順による。

○使用する文字は、異体字の類は通用の字体に直し、新字体があるものについては新字体で統一し、特に必要な場合に限る、注記のうえ旧字体等を用いる。また、書き下し文を含め、全て現代仮名遣いによる。

○韻目は広韻による。押韻しているかどうかの判断は、于安瀾『漢魏六朝韻譜』に従う。

○集注本を底本とし、「李善单注」の尤刻本・胡刻本・国子監本、「五臣单注」の陳八郎本、「五臣李善注（「六家注」）」の明州本・秀州本、「李善五臣注」の建州本を校勘に用いる。授業では、原則として個人でも所有しやすい影印本を優先して用い、必要な場合に限り、より印刷の鮮明な影印本で確認する。「雑体詩」の訳注で用いる略称と、実際に使用する各テキストの対応は以下の通りである（確認のために用いる影印本には＊を附す）。

集注本Ⅱ『唐鈔文選集注彙存』二〇〇〇年 上海古籍出版社

＊『京都帝国大学文学部景印旧鈔本 第三集』

一九三五年 金沢文庫蔵

＊『天理図書館善本叢書 漢籍之部第二卷』

一九八〇年 八木書店 天理図書館蔵

＊『京都帝国大学文学部景印旧鈔本 第九集』

一九四二年 里見家・天理図書館・土方家蔵

尤刻本Ⅱ『文選』一九七四年 中華書局 北京図書館蔵

（南宋淳熙八年 尤袤）

胡刻本Ⅱ『文選』一九八一年第二刷 中華書局

（一九七七年第一刷）（清嘉慶十四年 胡克家）

国子監本Ⅱ『中華再造善本 文選』二〇〇六年

北京図書館出版社

中国国家図書館（旧北京図書館）蔵

北宋天聖明道本

陳八郎本Ⅱ『景印宋本五臣集注文選』一九八一年

国家図書館（旧台湾国立中央図書館）蔵

（南宋紹興三十一年 崇化書坊）

明州本Ⅱ『日本足利学校蔵宋刊明州本六臣注文選』

二〇〇八年 人民文学出版社

＊『足利学校秘籍叢刊第三 第四卷』一九七五年

汲古書院 足利学校遺跡図書館蔵

秀州本Ⅱ『奎章閣所蔵六臣注本文選』二〇〇四年第三刷

韓國正文社（一九八三年第一刷）朝鮮古活字本

建州本Ⅱ『六臣注文選』一九八七年 中華書局

涵芬楼蔵 四部叢刊本

なお、『唐鈔文選集注彙存』だけが影印刊行している部分（潘岳、六九六頁の最後の二行から七〇〇頁の第二行まで）については、お茶の水図書館成實堂文庫の御厚意により、閲覧することができた（該当部分の翻刻と校勘についてはつとに成果がある。富永一登・衣川賢次「新出『文選』集注本残巻校記」『中国中世文学研究』三六、一九九九年七月）。実物は影印刊行されたものよりも文字が細く、影印本では前後（天理図書館蔵、土方家蔵）の部分と印象が少し違うように感じたのが、印刷等、工程上生じたに過ぎないこと、この篇については、元々一続きであったのに「文選切」としてばらばら

になったものが復元されたのであろうことが改めて確認できた。

『文選集注』江淹「雜体詩」

（二〇〇九―一〇年度）演習参加者（五十音順）

荒井 禮（あらい・れい）王粲担当 T A

加藤 文彬（かとう・ふみあき）

逆瀬川 彰子（さかせがわ・あきこ）

重野 宏一（しげの・ひろかず）T A

花岡 亜希（はなおか・あき）潘岳担当